



Photo1 練習を始める前に、生徒たちには競技以外のあいさつや生活態度などの大切さも伝えている。2「生徒たちと話すことが大切」。こまめにコミュニケーションを 3 平成26年の全国高校駅伝。2区終了時点で37位から追いつき5位に入った、印象に残る大会のひとつ。4 学校では、体育コースの主任を務めるなど他の先生たちからの信頼もあつい。5 総合運動公園クロスカントリーコース。「このクロカンのおかげで、選手たちは力がついている」と横山監督。

小林

こばやしびと
Vol.55

選手たちを見つめる横山監督の眼差しは今日も真剣そのもの。駅伝のまち小林の誇り「小林高校駅伝部」を全国制覇の栄光の道へ導くために…。



果だった。周りからは、「監督にはまだ若い」、「もっと経験を積んでからじゃないと務まらない」などと言われることも少なくはなかった。

「眠れない日が続き、涙したこともあった。でも自から志した道であるから負けてはいられない」と自分自身に言い聞かせる日々が続いた。

そして、5年目の平成12年、全国4位入賞。初めて結果を出すことができた。

しかし、結果を出し続けることこそが一番難しかった。そこから、12年間、入賞できない時代が続いた。あと十数秒のときもあった。もう入賞できないのではと考えてしまうこともあった。それでも、監督として選手と一緒に耐え続けた。

横山監督は、「練習は自分の目で見ることに」、「選手たちの見本となる生活をする」と徹底している。仕事が忙しく眠るのが遅くなったとしても、必ず毎朝6時から始まる練習に行く。服装など身だしなみに気をつける。「基本的なことですが、これをおろそかにしては、上手くいかない。生徒に尊敬される教師であり続けたい」と話す。

そして、平成24年に再び入賞を勝ち得た。そこから3年連続入賞と結果を出し続けている。

「悪いときも、良いときも厳しい言葉、優しい言葉をかけてくれる人が大勢いた。本当に多くの人に支えられていて、選手はもちろん私も、監督としても、人間としてもこのまちに育ててもらった。だからこそ、いつか全国制覇という結果で恩返しをしたい」。

選手たちを見つめる横山監督の眼差しは今日も真剣そのもの。駅伝のまち小林の誇り「小林高校駅伝部」を全国制覇の栄光の道へ導くために…。

不屈の名将

小林高校駅伝部監督

よこやま よしかず

横山 美和 さん

全国屈指の名門「小林高校駅伝部」。この部活を20年もの間率いてきた人がいる。

名将横山美和監督、48歳。全国高等学校駅伝競走大会で4度の入賞（平成27年12月18日現在）やインターハイ、国体での入賞など数多くの高校生ランナーを育ててきた。

横山監督の陸上人生は、小林中の陸上部から始まった。当時、3000円で日本ランキング3位に入るほどの選手だった。中学卒業後は小林高校駅伝部に入学し、高校2年、3年と全国高校駅伝を走り活躍している。その後、体育の教員になることを夢見て順天堂大学に進学した。

そして、大学時代が大きな転機となった。そのときの順天堂大学は、箱根駅伝で4連覇するほどの黄金世代。必死に練習をしたが、あと一歩のところまでレギュラーにはなれなかった。「本当に悔しかった。だからこそ、教員になり、強い選手を育ててライバルたちに勝ちたいと考えるようになった」と当時の心境を語る。

大学3年のときには、小林高校の夏合宿に行き練習をサポートをした。このとき、さらに指導者に惹かれていった。大学卒業後、小林に帰郷。28歳のとき、小林高校に赴任し、駅伝部の監督になった。

監督就任後、待ち受けていたのは厳しい現実だった。1年目は全国大会で33位、2年目は県大会敗退。思い描いていたものとは、かけ離れた結果だった。

多くの人に支えられ
監督としても、人間としても
このまちに育てられた
その感謝の気持ちをお忘れず
結果で恩返ししたい